

アンソロジー  
*anthology*

ね む  
合 歡

*Vol. 4*



# 2010 冬

## 目次

秋のはじまる……………	荒木絹江……………	2
薪能……………	石井宏幸……………	4
吉野吟行……………	井上悦男……………	6
田舎道……………	岩崎ゆきひろ……………	8
吉野散策……………	植田桂之……………	10
吉野の秋……………	奥山登志行……………	12
フレディー……………	北村文男……………	14
十三夜……………	小六誠一郎……………	16
三瓶野……………	桜本滋子……………	18
初時雨……………	角南房子……………	20
冬深し……………	田辺文枝……………	22
学園……………	富阪宏己……………	24
ビタミンC……………	名木田純子……………	26
小夜時雨……………	西村正子……………	28
木の実落つ……………	信里由美子……………	30
吉野山……………	三木瑞恵……………	32
いそぐ旅でも……………	米元ひとみ……………	34
秋日濃し……………	渡辺牛二……………	36
仲間の句に触れて……………	富阪宏己……………	38
俳句を始めて十年……………	植田桂之……………	39
自句自解……………	石井宏幸……………	41

## 秋のはじまる

荒木絹江

遠眼鏡やうやう佛法僧に会ふ  
不夜城の島へ螺旋に降るる夏  
夏潮と空にけじめとしての船  
道をしへ日か蔭げに戻つてしまひけり

新涼の海大玻璃に嵌めにけり  
雨降りて今朝軋みつゝ秋となり  
新涼の風の量感背ナにあり  
傘ほせば秋の蚊屯してをりぬ  
雨一と日芙蓉の白のうすにごり  
曼珠沙華すくつと朝を脱ぎにけり

## 薪能

石井宏幸

秋声の如く謡の流れ初む  
宵闇へ流れ込みたる能のこゑ  
冷やかに篝火の揺れ影の揺れ  
秋の星一つ掲げて能佳境

秋の風闇に火の粉を奪ひ去り  
雪晴の光の中の一戸かな  
風過ぐる形に乱れ雪柳  
閉ぢ開き海月の命透きとほる  
川蜻蛉草に戦げば草となる  
山鳩の遠く鳴きゐる落葉かな

## 吉野吟行

井上悦男

西行の庵へ時雨れて行きにけり  
時雨傘たたんで見入る西行庵  
雨雫落とす紅葉の色となり  
朽ちし木の芭蕉の句碑や溪時雨

見る人も一つ景なる紅葉溪  
落葉踏む音を踏みつつ落葉踏む  
木の実降る音の大きく跳ね返り  
朝寒や猫と目の会ふ如意輪寺  
烏瓜一つ残して如意輪寺  
振り返る紅葉の中の蔵王堂

田舎道 岩崎ゆきひろ

郷愁の円周の中鬼やんま  
腰をもて通草さがしてゐる視線  
虫の音やまらず子の方の浮子の引き  
十分で終る稲刈なりしかな

一羽来て二羽来て十羽小鳥来る  
榎櫃の実やつと覚えし田圃道  
この奥に古墳抱ふる柿畑  
烏瓜時の止つてゐる苦屋  
角ごとの木犀の香に足とどめ  
冬菜畑どうやら道に迷ひたる

## 吉野散策

植田桂之

参道を彩る桜紅葉かな  
参道の人まばらなる秋の暮  
秋深し人の少なき蔵王堂  
時雨れたる吉野の闇の蔵王堂

秋天へ一直線に吉野杉  
直線の杉秋天を突きにけり  
肌寒や梢に風の西行庵  
義経の隠れし塔を初しぐれ  
紅葉狩る人せきたてて初しぐれ  
谷へゆらり谷へゆるりと落葉降る

## 吉野の秋

奥山登志行

吉野いま桜紅葉の曼陀羅に  
遠山の霧の神々しき吉野  
秋雲にふと静舞ふ吉野かな  
深吉野の謎を深めて地虫鳴く

秘境めく霧の湧きたつ奥吉野  
天蓋の紅葉かつ散る西行庵  
錦秋の一目千本谷の闇  
吉野谷風冷え冷えと覚むる秋  
深吉野の闇夜を迷ふ秋時雨  
秋時雨法螺に晴れゆく吉野かな



フレディー

北村文男

黄落の真ん真ん中の時計台  
秋風の黄に染まりたる並木道  
散つてなほ威風堂々楷双樹  
銀杏散る先生ゐてもゐなくても

学びては遙か銀杏の散りにけり  
銀杏散り木の全貌をやつと知る  
華やぎと凋落の間散る銀杏  
落葉掃く隣の家の空見つつ  
フレディーのこと思ひつつ落葉掃く  
黄落やまた一つ積む思ひ出を

## 十三夜

小六誠一郎

ふらここを漕ぐ隠れなき晴天に  
夏の海心壊るる少年も  
眼の見えぬ猫よ晩夏の路地の奥  
百間の不気味な話稲妻す

大風の風のかたち崩れ稲  
ハンガーに明日の喪服を十三夜  
西国はわづかに雑木紅葉かな  
大声の世間話や柿畑  
七歳は祝うてやれず七五三  
初霜に月光降りぬ踏みてみる

## 三瓶野

桜本滋子

なほ奥へ神話街道七変化  
山頂へ吸ひ上げらるる夏の霧  
青芒日本海より晴れて来し  
三瓶野の雪加の刻む時の中

登山道の闇へと三瓶口開く  
万緑やリフトにゆだねゆく無心  
何も無いでも何かある晩夏の夜  
梅雨の闇奇蹟のやうな北斗星  
漆黒の闇に息づく緑かな  
佐比売野の闇に灯せる月見草

## 初時雨

角南房子

初時雨宛名の滲む手紙来る  
集落のときれとぎれの冬紅葉  
枯れ色の安らかなりし山眠る  
日溜りにくるまれ眠る干布団

冬菜畑明るき雨の通り過ぐ  
冬ざるる物に足音ありにけり  
寒雀群れをこぼれて来し狭庭  
声だして悴む心暖めり  
家路へと凍てつく星に刺されつつ  
寒灯の我を待つ灯と思ひけり

冬 深 し

田辺文枝

待ち合す如く子に会ふ盆の墓  
折りぐせのままに灯籠しまひけり  
山茶花のひたすらこぼれゆく忌日  
山あひに朝日射し込む冬菜畑

青信号なりて一息街師走  
文旦を持ってば愉快な重さあり  
冬深しわづかに残る実南天  
福寿草光たよりに北斜面  
寒明や斜め渡りに交差点  
あたたかや旅の朝湯に化粧して

## 学園

富阪宏己

入学の子等どことなく似てをりぬ  
囁と生徒の私語を結ぶ窓  
運動会どどどどどどと退場す  
蟻地獄見る子の知つてゐる孤立

クーラーの静かに期末考查果つ  
理科室の透明感や秋立ちぬ  
長き夜を一人にしたくなき生徒  
一つだけ受験子のまだ来ぬ机  
鍵つ子の部屋の寒さが受話器まで  
雪を来て生徒仲良くなつてをり

ビタミンC

名木田純子

弾初や一献交はすさんさ節  
白魚の骨泳ぎたる椀の中  
播鉢にかをり渦巻く木の芽和  
青鰻の酢の勝ちたるは母の味

苺摘むビタミンCの一日分  
秋の日のグラスに落ちてワイン色  
旅疲れ癒ゆ甘口の菊なます  
煮凝の溶け皿の鳥放たれし  
熱爛の手酌の背ナの語る過去  
道修町古き酒場に薬喰

## 小夜時雨

西村正子

出品の菊の機嫌を問ひに来る  
根負けをすする程つけて草虱  
一と口の通草の種のしたたかに  
木の实踏むびしりと音の弾く迄

ことごとく新し雨後の猪の跡  
片足に嵩を確め踏む落葉  
落葉踏む音して森の道ありぬ  
酔ひ少し路地を違へし小夜時雨  
拝観の列短日を奪ひけり  
北風やてくてく歩きほこほこと



## 木の実落つ

信里由美子

石庭に風聴きをれば木の実落つ  
地の固さ水の固さに木の実落つ  
木の実落つ音に静寂の完結す  
冬紅葉透けゆく空を重ねをり

もみづれるとは日の色を変へること  
散紅葉大地の黙に加はりぬ  
背山より風の昏れゆく秋遍路  
秋遍路暮れゆく風にせかさるる  
霧の灯に霧のあつまる夕べかな  
霧はしる音に追憶ついでゆく

# 吉野山

三木瑞恵

西行庵へと山深き落葉踏む  
谷底へ底へ紅葉の山深し  
しぐるるや吉野も奥に隠堂  
たちまちに霧の海なる吉野山

み吉野の谷を野菊の繋ぐ径  
茶の花の零れし白も濡れてをり  
これよりは参道となる野菊かな  
しぐれ傘離せぬ一と日吉野山  
み吉野の日暮れの鐘に秋惜む  
木の葉散る音さへ秘めて吉野の夜

いそぐ旅でも 米元ひとみ

裏木戸を押せば銀河へ続きけり  
夜といふ長きトンネル鉦叩  
潮騒の如くかなかな鳴き寄する  
ひといきの筆のかすれの涼しかり

家族ゐてひとりの佳かり夜の秋  
新生児室のごとくに桃並ぶ  
秋つばめ洗濯物をひとり干す  
穴まどひ我に惑うてゐたりけり  
シェフの背に秋の海あるガラス窓  
時雨忌のいそぐ旅でもなかりけり

## 秋日濃し

渡辺牛二

猪垣やまるで迷路の棚田道  
草紅葉歩幅小さく坂下る  
晴るる日の予感の霧の流れけり  
かそけしや田じまひ後の水の音

溝蕎麦や崩れ木橋の高さまで  
穴惑ひ逃げるが勝と隠れけり  
気まぐれに好かれてしまふ秋の蜂  
秋日濃し二人ベンチに語らへば  
まだ青き毬ふみ分けて栗拾ふ  
秋晴や棚田づたひに宅配車

## 仲間の句に触れて

富阪宏己

昨年、合歓の会の句会へ出された句の中で、強く魅かれた二句について、私の思い入れの一端を述べたいと思う。

芋虫も泣くや悲しきことあらば

渡辺牛二

芋虫は蛾の幼虫で、毛がなく丸々と太っている。

芋の葉っぱを黙々と食べる。何も考えない。何も感じない。ただ生きて、ひたすら食べるのみである。

そんな芋虫を、作者は見つめている。芋虫と同化するほど見つめた作者は、芋虫も悲しいことがあれば、泣くのだと断定したのである。

私たちは黙々と働いている。自我を控え目に

し、喜怒哀楽を露骨に出さず、社会組織の一部分として生きている。それは大自然の中の一部として生きる芋虫と似ている。

作者の心が芋虫と同化したとき、芋虫は作者であり、作者は芋虫となったのである。私だって悲しいことがあれば泣くのだと、思わず口にした作者の声は、もの言わぬ芋虫の声となって、作者に届いたのだ。すでに中秋というのに、まだまだ日差しの強い頃の、作者と芋虫の出会いである。

天地有情という言葉がふと、甦った一句である。

鶉騒ぎゐてもなき日なりけり

石井宏幸

鶉はツグミぐらいの大きさの、青灰色をした鳥である。

秋に群れをなして、人里にやってくる。「ひい

## 俳句を始めて十年

植田桂之

私は俳句の世界に迷い込んでもうかれこれ十年近くになる。

先輩に「退職したら、趣味に俳句でもやってみたら」と勧められるままに安易な気持ちでこの世界に入ったのである。

そして今頃になって、俳句を詠むにあたっての必要な諸々の能力が比較的乏しいということに気が始めた。

句作には、見る対象から人の感じ取れないものを、人とは違った印象を感じ取る感性が、人の及びもつかないたくましい想像力が、言葉の袋からあふれ出るほどの豊富なボキャブラリーが、そしてそれらを自由自在に駆使できる表現力が必要だとやがて思うようになった。

私は俳句を詠む行為を通して、懸命に自分の中に

よひいよ」と、その鳴き声は騒がしい。作者にとつての日常は、悲しみに打ち砕かれることも、歡喜に酔いしれることもなく過ぎてゆく。今日も、いつものごとく変わり映えのしない一日を、何か満たされない気持ちと、無事なんだと思う安堵感を交錯させながら、鶉の騒がしい鳴き声を聞いている。鶉が騒げば騒ぐほど、作者は自分の日常と対比させてしまうのである。

作者が努力して築き上げた安定ではあるが、このままで良いのか、このまま安住して良いのかと自問自答する作者の声が、どこからともなく聞こえてくる。

それは晩秋の頃の落ち着いた季節感と一つになって、読者に迫ってくるのだ。

作者のふとした吹きが一句となった時、作者から独立した作品として、読者に多くを語り始めるのである。

あるそれらを探し求めた。  
しかし、どうも満足できるほどのものはない。  
在っても実に不十分な代物でしかない。

―表現が拙ければ、経験と練習を積みめば、表現力は上手くなるはず。

語彙が乏しければ辞書と読書で何とか増やすことは出来る。

感性が鈍ければ努力して磨けばいい。

まあ、そんな風に思っ、これまで句作を続けてきた。

俳句をしだしてからは、確かにそれまでよりは、周囲の事物によく目が行くようになり、花や樹木の名前など多く覚えるようになった。

だが、感性だけはどうにもならない。

これは生来のもので、どうあがいてみても鋭くなったり豊かになるものではない。

十年近くも俳句の世界をさまよっていれば、俳句の奥深さがよく分かり、それに反比例して自分の

力の浅さというか無さが身にしみてよく分かる。

私は今の自分の俳句に満足できていない。

これ以上自分の句のレベルを上げるのはとても無理だと思っている。

「我が句作名句求めて四句八句」といきたいところだが、「我が句作迷句求めて四苦八苦」といった感じで、力の限界を痛感している昨今である。

しかし、句作を止めるつもりはない。下手な横好きで、俳句を詠むのは苦しいが楽しいから。

合歓の会の皆さん、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

## 自句自解

石井宏幸

二十一年二月にお話があり、三月からの野分会芦屋例会に参加することとなった。JR芦屋駅を出て、汀子先生のご自宅まで徒歩で二十五分程の距離を歩いていく。二十年九月から芦屋ホトトギス会に参加し、その日は、汀子先生宅に隣接する虚子記念文学館の投句箱に、道程の囁目で作った句を投句してきたこともあり、場所は分かっていた。

二十一年七月の野分会芦屋例会に参加するため、芦屋川の河川敷をいつものように歩いて汀子先生宅へ向かう。河床には蘆が丈を伸ばし始めている。芦屋川は六甲山水系の一つで、神戸市の他の河川と同様、六甲山に集中して雨が降ると、一気に増水して、懸う人々をも押し流す危険があ

る。ただし、いつもはそんなに水量も多くなり、蘆の繁茂しているところでは、水も蘆に隠れるようにして流れている。

その蘆群の中を黒い翅をひらひらと輝かせて川蜻蛉が飛んでいる。気が付いてみると、蘆のあちらこちらに川蜻蛉が止まり、少し葉を離れては、別の葉に止まったりしている。

川蜻蛉離ればなれに吹かれたり

川蜻蛉は、もともと細く目立たないが、蘆に止まり、その蘆が風に吹かれだすと、蘆の葉と同調して一層目立たなくなる。まるで蘆と一つになったように。

川蜻蛉草と戦げば草となる

その後、推敲して、

川蜻蛉草に戦げば草となる

とした。草も一緒に戦ぐことは言わずとも、川蜻蛉が草になることを言えば焦点が定まると考えたからである。

## 句会と吟行の記録

平成二十一年に行った句会と吟行は次の通りです。

- 一月 吉備津神社 十日戎吟行
- 二月 四国松山 日帰り吟行
- 三月 高梁 古民家吟行
- 四月 倉敷酒津 お花見吟行
- 五月 津山 衆楽園吟行
- 六月 四国丸亀 団扇工房吟行
- 七月 国際交流センター 句会
- 八月 国際交流センター 句会
- 九月 国際交流センター 句会
- 十月 岡山 こどもの森吟行
- 十一月 吉野 一泊吟行
- 十一月 中央公民館 句会
- 十二月 年忘れ納め句会

(純子)

## 編集後記

- ◆今回もたくさんの方の原稿をお寄せ頂きありがとうございます。
- ◆回を重ねるごとに皆さん努力され、今回もそれぞれに個性の出た原稿をお寄せいただけたのではないかと感じています。
- ◆メールにしろ郵送にしろ、届いた原稿を最初に開くときの心のときめきは、ちょうど、若い頃にラブレターを開いたときと同じです。
- ◆それは送られる方の、「よし、これで！」という思いがこもっているからではないでしょうか。
- ◆そんな原稿を最初に読ませていただけることを、光栄に思っています。
- ◆次号もよろしくお願いします。

(牛一)

## アンソロジー合歓 Vol.4

平成 22 年 2 月 1 日 発行  
発 行 合歓の会  
印 刷 弘文社（津山市）  
発行責任者 富阪宏己  
連 絡 先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

Email : info@nemu819.net